

## カナダコウガイゼキショウの道内初確認と導入経緯

美唄市 新田 紀敏

2018年9月、南幌町の夕張川河川敷で見慣れないイグサ科植物を発見した。この植物は浅い水溜まりの周縁でコウガイゼキショウ、オオイヌノハナヒゲ、アブラガヤなどと混生していたが、高さが70cmほどとイグサ類から抜け出しており、濃い緑色の葉・茎と多数の小花からなる球形でコウガイゼキショウのような花序を多数持っており、群落の中で目立っていた。植物体は強く、素手で採集しようとしたが、容易に引き抜くあるいはちぎり取ることはできなかった。結実期だったので種子を見ると、アメ色で光沢があり長さ1.3mmほどの細長い形をしており、両端に淡色の細長い翼があった。道内の平地にあるこの仲間で同タイプの種子をつけるのはホロムイコウガイのみなので、既知の植物ではないと思い、当会の何人かの会員に尋ねていたが、五十嵐博氏から *Juncus canadensis* ではないかとの情報が入った。

*Juncus canadensis* J. Gay は、カナダからアメリカ合衆国の乾燥地帯と極地を除いた広い範囲に分布し、海岸から内陸まで主に湿原など湿った環境に生育する。群生する頑強な植物で高さは40-100cmに達する。葉は円柱形で隔壁がある。花序は多数の頭花からなり、頭花は多くの小花で球形を成す。花被片は披針形で3脈あり、内花被片がわずかに長い。雄蕊は3本。果実は3稜形で先が急に細くなって突端となる。種子は狭紡錘形で1.2-1.9mmだが、半分

以上は細く淡色の付属体である (Gleason and Cronquist 1991)。

これらの点が一致し、今回の植物は *J. canadensis* と同定した (図1)。先に述べた以外の特徴としては、円柱形の葉は長さ13cmほど、膜質で長さ2mmほどの葉耳が目立つ。朔果は花被片と同じか少し長い。花被片は先がとがるなどがあった。

この植物、国内の文献には見当たらないので、日本新産か否か検討していた折、2018年に出版されたばかりだった、神奈川県植物誌に載っているとの会員からの情報があった。そこには和名が「カナダコウガイゼキショウ (勝山輝男新称)」とあった (関口 2018) が、出典を検索しても見つからず不思議に思っていた。今回報告するに当たって勝山氏本人に問い合わせたところ、他の人から大学の薬用植物園で発生した植物の同定を頼まれたもので、野外に逃げ出してはいないのでどこにも発表はしていない。和名をつけた覚えはないが、種小名が *canadensis* なので標本にカナダコウガイゼキショウと書き込んだのかもしれない (2019年8月私信) とのことであった。したがって、和名のカナダコウガイゼキショウは関口 (2018) が初出とするのが正確なようである。

ところで最初に戻って何故夕張川の河川敷を歩いていたかということ、北海道開発局が行っている湿原再生事業が関係している。この辺りの夕張川はかつての幌向湿原

に掘り込まれた人工河川で、河川敷には湿原当時の泥炭が残されている。多くは販売用ピートとして掘り取られているが、まだかなりの厚みで残っている場所もある。同事業はここにかつての湿原環境を再生しようとするもので、筆者は植物調査と導入する苗の育成法確立を担当し、しばしば現地を訪れていた。同じように札幌市立大学の矢部教授もこの事業に関わっており、大学の屋上で輸入乾燥ミズゴケを使って湿原植物を栽培していた。その時にもこの植物が出ていたとのことで、その栽培植物の一部を湿原再生地に導入した際に一緒に導入されてしまったものが、その後の降雨などで流出し、今回の場所で定着していたものと思われる。そう言われると、勝山氏の“発見”場所も大学の薬草園で水生植物を植えていた鉢（関口 2018）とのことであり、神奈川県 2 産地のうち 1 カ所も薬草園跡（関口 2018）とのことなので、いずれも輸入ミズゴケに由来したものと考えてよさそうである。矢部教授によると使用した水苔はニュージーランド産とのことだったので、南半球のニュージーランドにこの植物があるのか疑問に思い、ニュージーランド国立大気水圏研究所 (NIWA) が web 上に公開している New Zealand rushes (*Juncus*): factsheets and key (<https://www.niwa.co.nz/gallery/new-zealand-rushes-juncus-field-identification-guide/juncus-factsheets-and-key>:2019 年 9 月 20 日確認) を調べた結果、ニュージーランドには 50 種を超える *Juncus* があり、このうち 2/3 は外来種とのことで、*J. canadensis* は最も普通に見られるもののひとつとの

ことであった。同サイトから species-level factsheets をダウンロードして形態を検討した結果、似たものはあるが、種子に付属物があり、全体が緑色の種は *J. canadensis* のみであった。

以上から、今回発見した *J. canadensis* は北米原産の植物が一旦ニュージーランドに入り、そこから乾燥ミズゴケに紛れて日本へ入ってきた二重国籍の外来植物であったと考えられる。今回の発見は、輸入乾燥ミズゴケは、自然乾燥させただけのものは、様々な現地種子を含んでおり、発芽力を維持しているものもあるので注意が必要ということを示している。このことを教訓として、いらぬ外来種を導入しないよう、輸入ミズゴケは十分煮沸して使う必要があることを再認識する必要がある。

これには後日談があり、札幌市立大学の屋上で栽培されていた植物の一部はバットごと美唄市宮島沼水鳥・湿地センターへ譲られており、2019 年にはそこでもこの植物が出ていた (図 2)。

証拠標本：北海道空知地方南幌町，夕張川河川敷泥炭上（採集者：新田紀敏，26 Sep. 2018, SAPS053971).

いつもながら会員の五十嵐博氏、藤田玲氏には重要な文献情報を頂いた。勝山輝男氏には初認時のいきさつを教えていただいた。矢部和夫教授、株式会社エコテック坂元直人氏には今回の導入に関する情報を頂いた。美唄市宮島沼水鳥・湿地センター加藤裕子氏には発生情報を頂いた。ここに記して感謝する。

(北海道立総合研究機構林業試験場)



引用文献

関口克巳. 2018. A097 イグサ科  
*JUNCACEAE*. 神奈川県植物誌調査会  
(編). 神奈川県植物誌. pp. 387-398. 神  
奈川県植物誌調査会. 小田原.  
Gleason, H. A. and Cronquist, A. 1991.  
Manual of Vascular Plants of

Northeastern United States and  
Adjacent Canada Second Edition. The  
New York Botanical Garden, New York.  
Holmgren, N. H. 1998. Illustrated  
Companion to Gleason and Cronquist's  
Manual. The New York Botanical Garden,  
New York.



図2 宮島沼での発生個体